サラリーマン裏太閤記

志茂田景樹

サラリーマン裏太閤記
志茂田景樹
© Kageki Shimoda 1994

1994年3月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-185619-7

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

サラリーマン裏太閤記

志茂田景樹

目次

第一章　アイドルは社内郵便局員　7
第二章　奇妙な誘拐と出世の条件　39
第三章　出世の裏レースへ、それゆけ　75
第四章　影の大物軍師　105
第五章　虎穴に入って大金をせしめる　136
第六章　サラリーマンは悲しき稼業　177
第七章　裏係長の辞令　227
第八章　女とカネは夜風に乗って　267
第九章　最後の勝負は急襲で　298

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

サラリーマン裏太閤記

第一章　アイドルは社内郵便局員

1

「あーあー、あー」
大欠伸の声が、散らかし放題の部屋の中に響き渡った。
とにかく、散らかっている。
不快な臭いも、漂っている。
汗と垢と、そしてすえた食物の臭いとが、ごっちゃになった独得の臭いである。
いま大欠伸をして、ベッドに上体を起こしたのは、その臭いの生産者である金富秀吉である。
金が富むと書き、金富という名字は、生れながらに金に困らなそうに思える。
だが、なんとこの部屋は、金富という姓とかけ離れた雰囲気だろう。
一応、しわくちゃのシーツが敷かれているが、大きなシミがいくつもついている。
それに、すり切れている。

全体の色も、醤油の薄い色のようになっている。
毛布はすり切れて、煙草の焼けこげの穴が三つもできている。
絨毯の上には、古いスポーツ新聞や漫画雑誌、週刊誌が乱れ重なって、足の踏み場もない状態だった。
窓のカーテンは、半分近く、外れて垂れ下がっている。
サイドボードの上では、細身の花入れに挿された造花が、すすけていた。
花と花の間に、小さな蜘蛛の巣が張られている。
そんなところに巣を張っても、引っ掛かる虫が、この部屋の中に生息しているのかと、いつかこの部屋に入った同僚が、不思議がった。
金富は、割れた窓ガラスに、厚紙を貼っている。
貼り合わせたところに、少し隙間が生じている。
きっと、羽虫の類がそこから出入りしているのだろう。
いずれにしても、この部屋の汚さと散らかしようを、挙げていったらキリがない。
金富は、もう一度、欠伸をした。
壁のカレンダーを見る。
井立電機・下井草寮の一室である。
築歴五年だから、それほど古くないが、この部屋だけは、すでに築歴二十年、三十年に見える。

カレンダーを見ても、今日は何日だったか、すぐにわからない。
昨夜も、午前四時まで夜更しをしてしまっている。
いまは、午前七時五十分である。
まだまだ眠たかった。
だが、いま起きて、それも超特急で出社の仕度をしないと、完全に遅刻する。
金富は、井立電機本社の総務局総務部第三総務課第六係の勤務である。
三十三歳で、まだヒラ社員なのが情けない。
でも、当の金富自身は、情けながっている風もない。
井立電機の本社は、築地にある。
築地の中央市場から、程近いところだった。
とにかく、八時にこの部屋を出ないと、遅刻する。
やっと金富は今日が七日なことに、気がついた。
四月七日である。
金富はまだ胸までかかっていた毛布を、ガバッと剝いだ。
「いけねえ、今日は創立記念日だ！」
ベッドから飛び降りて、トイレ兼用の洗面所へ駆け込んだ。
創立記念日となると、会社は休日になるのが普通だが、井立電機の場合は、本社も含めて各地の支社、工場、営業所で、一斉に芸能大会が行われる。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton

本社の場合は、保谷市の東伏見にある〈井立電機・東京総合体育センター〉で行われる。この日に備えて、はりきって練習をしていたのは、本社の部長職・課長職である。部長職だけで、コント劇を、課長職だけで、ライン・ダンスを行うのが、恒例だった。そのため、部長職や課長職は、もうひと月も前から、週一、二回の割合で練習を行ってきている。

その他の社員も何かやらなければならないが、そんなに、練習を熱中してやる者はいない。シラケている。

金富たちの部門は、ロック演奏をやることになっていた。

三度くらい練習をやったらしいが、金富は一度だけしか出ていない。

とにかく、〈創立記念日芸能大会〉は、一般社員が部長職や課長職のバカバカしい芸を見て、内心で小馬鹿にしながら、拍手喝采をする、上役と部下の交歓会といった色彩が強い。

金富は、十分で歯を磨き、顔を洗い、モジャモジャ髪をかきあげて、しかも服を着て、部屋を飛び出した。

その仕度の中で一番時間がかかったのは、穿いていくパンツと靴下を選ぶことだった。

なにしろ、洗ったものはきれている。

一度穿いたものを手に取って、臭いが弱いものを選び出すのである。

だが、そんな無精なわりには、また着ている物がくたびれているわりには、外出姿になった金富は、どこかに洗練されたセンスの片鱗が見えた。

そして表情も、すっきりしているわけではないのに、どこか晴ればれしして見える。
目が大きく、眸が澄んでいるためである。
金富は、寮の玄関から外へ出た。
この下井草寮は、男子独身寮で、約百八十人が住んでいる。

2

門を出るところで、賄いをやっているオバサンに呼び止められた。
「あ、ちょっと、ちょっと、金富さん――」
「えっ、なんですか？」
金富は、足を止めて賄いのオバサンを見た。
オバサンといっても、まだ三十四歳である。
「そのズボンじゃ、あまりにもシワが多くてみっともないわよ」
「いいんですよ、石原さん」
金富は、手を振って、
「めんどくさいから、これでいいんです。気にしないでください」
と、言った。
「いいから、いいから。ちょっと、私の部屋へ来なさい。アイロンをかけてあげるわよ」

賄いのオバサン――石原さんは、金富の袖を摑んで引っ張った。
力がある。
「あなたを見ると、放っておけなくなっちゃうの。とにかくいらっしゃい。大急ぎでアイロンかけてあげるわよ」
「いいんですよ。遅刻しちゃいますよ。困ったなあ――」
金富は、本当に困惑したように、顔を歪めた。
「いいから、来なさいよっ。どうせまた、朝食もとれなかったんでしょう。なにか食べさせてあげるわよ」
石原さんは、なおもグイグイと、金富を引っ張った。
金富は、しかたなく引っ張られるままにした。
東京総合体育センターへ集合する、この寮に住む独身社員が、足早に玄関を出ていく。
マイカーで走り出ていく者もいる。
二、三人が足を止めたので、金富は恥しくなって、
「もういいですよ、石原さん」
と、言って、振り切ろうとした。
瞬間、ビリッと袖が大きく裂けてしまった。
「あああ、あー」
石原さんは、びっくりして手を離した。

「困ったな――」
金富は、苦笑いした。
「ねえ、主人のジャケットを貸してあげましょうか。そうしなさいよ」
「いや、もういいですよ」
金富は、石原さんの好意がうっとうしくなって、パッと走り出した。
石原さんは、あっけに取られて見送って、
「でも、なんだかたいして齢が離れていないのに、私の子供みたい」
と、つぶやいた。
石原さん夫婦には、子供がいない。
駅までマラソンしようと、金富は走り出した。
その金富を追い越しながら、クラクションを鳴らして、ブルーのカローラが停まった。
運転しているのは、女である。
身体を伸ばして、更に左手を伸ばすと、助手席側のドアを開けた。
「どこ行くの、カネさん？」
若い女だった。
目が切れ長で、キツい顔立ちをしている。
少しボーイッシュな雰囲気の持ち主だった。
「ああ、ミッちゃんか。東伏見まで行くんだ」

「お乗りよ。送ってってあげるわ」
「悪いな、じゃあ――」
金富は、助手席に乗り込んだ。
カローラの主は、浅草みちよである。
二十二歳で、下井草駅の近くで、小さなアクセサリー店をやっていた。
ほとんど店番用に、アルバイトの女子大生をひとり、使っている。
金富は、そのみちよと半年ほど前に、下井草駅前の喫茶店で知り合った。
ばかに気が合って、よく一緒に遊び回った。
みちよは、酒も強いし、ディスコも好きだったが、気性が竹を割ったようにサッパリしている。
「東伏見で、何があるの？」
「今日は、会社の創立記念日だ。それで、東伏見の総合体育センターで、芸能大会をやるんだよ」
「へえ、芸能大会。そんなことやるより、休日にしたほうがいいのにね」
「年間行事のひとつになっているから、そうもいかないんじゃないのかな」
「じゃあ、出勤になるの？」
「まあね。ところで、ミッちゃんはどこへ行こうとしたところなんだい？」
「午前中、ちょっとドライブしようと思っただけよ。今日は春日和（はるびより）だし、桜もそろそろでしょ

う。こんな日に、午前中からあの狭い店の奥にいるなんて、まっぴらだわ！」
「それもそうだなあ。僕もなんだか、芸能大会へマジに行くのが、いやになっちゃったよ」
「少し遅れてったら？」
「そうか――」
金富は、その気になっている。
流されやすい性格である。
上役のほとんどは、自分の出番がくるまで落ち着かず、出番が終っても、更に上役の出番をきちんと見なければならず、ヒラの社員を監視している暇がない。
「そうしなよ」
「そうしようか。昼頃にヒョッコリ行って、会場に入ればいいんだ」
「決めたのね。じゃあ――」
みちよは、アクセルを踏み込んだ。
ブルーのカローラは、グーンとスピードをあげた。
新青梅街道に出た。
下りは空いている。
みちよは、何度か追い越しをしながら、あまりスピードをさげることはしなかった。
たちまちのうちに、両側の風景は、郊外らしいものになってきた。
「ああ――」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.erton